

この人に聞く④

ふるさとの 伝統文化を 守るとりでに



北方文化博物館館長

伊藤文吉さん

伊藤文吉さんは新潟市江南区沢海の北方文化博物館の館長であり、また千町歩地主であった伊藤家の八代目の当主です。世界百カ国以上をまわって得た知見をもとに、日本の伝統文化の継承を訴えておられます。 編集部

ある出会い

昭和二〇年一〇月のある日、沢海の伊藤邸の土蔵門の前に米進駐軍のジープが停まりました。四人の米兵がジープから降りて、土足のまま屋敷に上がり込んできました。

その日はあいにく父が留守で、私は丁度大学から帰郷して家にいたときです。村の人や周りの人は私が学生なので英会話が出来ただろうと思っていたようですが、何しろ戦争中で大学では英語の授業もなく、英会話はほとんど出来ませんでした。

通訳の日系二世の兵士もいたのですが、こちらも日本語がほとんど出来ない。だからお互いに何を言っているのかさっぱり分からない。

そのうちに四人の兵士は屋敷内を調べ始めましたが、どうやら捜索の目的は隠匿物資があるとの情報を受け

ての家宅捜索だったようです。

私の父（七代目文吉）はアメリカに七年間留学して
いましたから英語が話せるので、翌週に来てくれと話
したのが、私の英会話で唯一通じました。

翌週には今度は米軍将校がやってきました。そのと
き私の父は堂々と胸をはって英語で話していました。
戦争中に威張っていた役人や警察官が進駐軍の前で卑
屈になっているのに、私は親父は偉いと思いました。
サムライだと思いました。

米軍将校たちが私の屋敷にやってきた目的は、ここ
を米軍将校の倶楽部にするつもりでした。ここは部屋
数も多いので、まるで集合住宅のように感じたのでしょ
う。その会話のなかで、将校の一人であるライト中尉
は私の父に「あなたの英語にはアメリカの地方訛りが
ある。アメリカにいたのではないか」と尋ねました。
父はアメリカ留学が知れて通訳として進駐軍に徴用さ
れることを心配して「私の英語は日本で覚えた」と返
事しました。

ライトさんとはそのご何回か屋敷に招いて交流を重
ねるうちに、父は話の弾みでアメリカに留学していた
ことを話しました。「どこの大学ですか？」「ペンシル

バニア大学です」「なんですって、私も同じ大学です。
このときのライトさんとの出会いが豪農の館を博物館
にするきっかけになりました。

父は既に戦前から豪農の館を財団法人史蹟文化振興
会（後に北方文化博物館と改称）として残す計画をもつ
ていました。

父の計画を聞いたライトさんは、この屋敷には日本
の伝統文化が残っている。あと二、三年もすれば日本
の文化もアメリカ化するだろう。日本の生活文化とし
ての伝統文化を後世に伝える必要があるとして、援助
を約束してくれました。

早速、翌二一年の二月には設立が許可されました。
おそらくこの背後にはライトさんの助力があったと思
います。

こうして北方文化博物館は戦後生まれの私立博物館
の第一号として生まれました。

豪農の館は北方文化博物館と命名されたわけですが、
これはスウェーデンのストックホルムにあるノルデス
カムジール（北方博物館）にヒントを得て父が命名しま
した。

このノルデスカムジールは一九世紀末につくられたも

のですが、美術品の展示が主ではなく、暮らしや生活道具などのスウェーデンの生活文化を見せるものです。

私は父の死後、デンマークに三、四年いましたので、このノルデスカムジーを訪ねたことがあります。

館内を見てまわって、父はこういうことを夢みていたのだとそのとき知りました。

ライトさんとはその後は音信不通になりましたが、一九八四(昭和59)年にアメリカで四五年ぶりに再会しました。また一九八五(昭和60)年にはライトさんご夫妻を北方文化博物館の招待でお招きすることが出来ました。

私はこの博物館のプランを立てた父と、設立に多大な援助をしてくれたライトさんのプレートを嵌め込んだ日米友情の記念碑を、大玄関前に建設しました。この記念碑の建設をライトさんには生前に話してありましたが、ライトさんは「私は何もしてません」として固辞されました。

ライトさんは亡くなる前に、自分の遺骨の一部を沢海に埋めてほしいと遺言を残されました。

いまライトさんは、彼が愛した桜の木の下で静かに博物館を見守っています。

思い出

長男である私は地元の沢海小学校に入学しました。下の二人の弟も沢海小学校に入学しましたが、その後第二人は東京の慶応大学の付属の中学部に入学しました。

私は沢海の小学校から新潟師範学校付属中学校に二年間在学して、その後はどういふことか東京の天台宗中学校に入学することになりました。そして一九四三(昭和18)年に慶応大学予科に入学しました。

私が弟たちと違って上京する前に新潟で学んだのは親父の方針でしたが、小さいときに生まれ故郷をよく覚えておきなさいということだと思っています。

戦争中は学徒動員も経験しました。米軍機から機銃掃射を受けて逃げまどつた経験もあります。

終戦後、大学の授業が正常化したので、また上京して大学にもどりました。

そんなある日、友たちと野球をしていてグラブの皮ヒモが抜けてしまいました。当時のグラブは贅沢品でしたから、皮ヒモを引張って千枚通しでグラブの穴に通そうとしました。

ところが誤つて右目を突いてしまいました。

ふだんのようにメガネを掛けておれば防げた事故でした。診断によれば外傷を受けた右目をそのまましておけば、正常な方の目もダメージを受ける恐れがあるということでした。

私は眼球を摘出する決断をしました。

私はあの時こうすれば良かったとか、ああすれば良かったとか、省みてものを考える人間ではありません。ハンデイを背負つたことで逆に前向きに生きることを学んだと思います。

伝統と日本人

私はいままで世界百力国余りを訪ねてきましたが、そのたびに最近の日本は変わってしまったと思います。最近の日本では子どもを生んでも子どもの教育がありません。親が子どもの育て方を知らない。生みっぱなしになっています。

また若い人の言葉の乱れが甚だしい。言葉の乱れは文化の衰退に連なります。言葉は文化です。ところが、なにを食べてもやたらに、「おいしい」、「甘い」、「やわらかい」、「すごい」などという言葉で表現していま

す。あるいはなんでも、「かわいい」の一言で済ましてしまう。例えば「すごい(凄い)」という言葉は本来恐ろしいという意味で使われていました。日本的言葉が使われなくなっています。

鯛も平目も食べたことがなければ、その違いは分かりません。だからなんでも「おいしい」で片付けてしまうことになります。個性を感じません。

アフリカのケニヤに行ったとき、キリンが足を踏ん張つて小便をするところに出会いました。それを見たマサイ族の子どもがキリンの足の下に入り、嬉々として小便シャワーを浴びているのを目にしました。排泄物は本来きれいなものですが、マサイ族の子どもの表情が実に生き生きして、いい顔をしている。ところが日本に帰ってくると、日本の子どもはいつも不満タラタラの表情をしています。

フィンランドは陸地の三分の二が湖で貧しい国でしたが、いまは老後の保障がよく発達しています。教育も優れています。その背景には古いものを大事にして、親が伝統を子どもに伝えているからだと思えます。

新潟市とフランスのナント市が友好都市協定を結んでいます。最近、ナント市の市長を団長とする一行が

新潟市の招待でやってきました。

ナント市の方に日本の印象を伺いますと、「表情のない国」という返事が返ってきました。建物でも住居か倉庫が分からない。表情や個性がないといっていました。

彼らに言わせますとナント市はフランスで一番美しい町だといえます。ところがナント市の市長さんは、フランスにはフランスで一番美しい町を称しているところは三八都市もあるそうです。

彼らは自分の住んでいる町の個性に誇りを持っていくことがうかがい知ることができます。ですから私はこの博物館の職員には、「ここが一番いいところ」と自分のふるさとに誇りをもって欲しいといっています。何でもかんでも「すごい」とか「おいしい」とかの個性に欠ける表現からは、自分の住む町に誇りは生まれません。

いま、守りたいもの

伝統文化を伝えるということは、人を数多く呼ぶようなイベントでは育ちません。私利私欲でも育てることは出来ません。

伝統は急には出来ません。そこに住んでいる人たちの長い共同生活の営みのなかから生み出されるものです。

庭の松の木が枯れたら、また同じような松の木を同じ場所に植えなければなりません。そのためには樹木や職人を確保しておかなければなりません。

ここでは修復などの維持管理に際して、見積書をとります。見積書をとればどうしても安い方をとるでしょう。

高くても本物でなければなりません。そしてやはりあるべき所に、あるべき姿で存在しなければ意味がありません。

それが伝統文化です。

日本は三流国になりました。戦後、日本はアメリカを目標に歩んで来ました。しかしいまのアメリカは昔のアメリカではないことを悟る必要があります。

この間に日本人の心も変わりました。誰が悪いのでもありません。日本が日本でなくなったのです。この流れに句読点を打ち、改行しなければなりません。そして失われた日本の伝統文化は回復しなければなりません。それをやるには政治家でも教育者でも駄目です。

他人に聞くのではなく、まず自分から始めなければなりません。

これからはそんな子どもたちを増やしていかなければなりません。私は山北の山のなかに山小屋・岩船山荘を持っています。集落からさらに奥に入ったところ。ここにはラジオもテレビもありません。便利なものはほとんどありません。

数年前の土砂崩れで建物は傷んでいますから、今年は修理して再開します。まず子どもたちを親から離して、子どもと寝食をともにして、子どもが大自然のなかで育つ手助けをしたいと思っています。

戦後、多くの日本の伝統文化が失われました。私はお金で買える美術品を展示する美術館ではなく、日本人の長い生活のなかでつくられてきた伝統文化を守り、伝える博物館を育てようと戦後一貫して追求してきました。

そういう私の考え方、哲学を託せる人にこの博物館を任せたいと思っています。

私には子どもがいませんので、私のDNAをもつ、末弟の娘夫婦を養子に迎えました。

私はいま北方文化博物館の館長と理事長を兼任して

いますが、いずれは養子の彼に館長を継いでもらうことになります。

また理事長には外部の方で、私の哲学を理解できる方をお願いすることになるでしょう。

私には小学生になる孫がいますが、高校までは日本で学び、その後は海外の伝統ある大学で、伝統のもつ力を学んでほしいと思っています。そして寮生活を体験して、先輩と後輩の人間関係も学んでほしいと思っています。

(文責・大滝浩道)

